

[各種報告：査読付]

第23回アジア陸上競技選手権大会における投擲競技の報告

疋田 晃久¹⁾, 與名本 稔²⁾, 田内 健二³⁾

Report of throwing event at the 23rd Asian Athletics Championship

Akihisa HIKITA¹⁾, Minoru YONAMOTO²⁾, Kenji TAUCHI³⁾

アブストラクト（和文）

第23回アジア陸上競技選手権大会は、2019年4月21日～24日にかけてカタール・ドーハで行われた。この大会について日本人選手の活躍状況並びにアジア各国の投擲競技の現状について報告する。

1) 九州共立大学スポーツ学部スポーツ学科
2) 東海大学体育学部競技スポーツ学科
3) 中京大学スポーツ科学部競技スポーツ科学科

1) Kyushu Kyoritsu University, Faculty of Sports Science
2) Tokai University, Faculty of Physical Education
3) Chukyo University, Faculty of Sports Science

1. はじめに

第23回アジア陸上競技選手権大会（以下、アジア選手権）は、2019年4月21日から4月24日までハリーフア国際スタジアム（カタル・ドーハ）で開催された。日本選手団・投擲ブロックは全8種目、選手14名、投擲コーチ3名で大会に臨んだ。

[大会の位置付け]

この大会はアジア地域においてアジア大会と同規模であり、この大会で優勝すればエリアチャンピオンとなり2019年9月27日から10月6日に開催されるドーハ2019世界陸上競技選手権大会の出場権を獲得できる試合であった。また2020年7月24日に開幕する東京オリンピックに出場資格する為の重要な位置付けの試合でもあった。東京オリンピックに出場資格を得る方法は、国際陸上競技連盟（以下、IAAF）が定める参加標準記録（以下、参加標準記録）の突破、もしくは世界ポイントランキングで上位に入るかの2通りとなっている。しかし、IAAFが定める参加標準は非常に高い記録が設定されており、投擲種目では8種目中5種

目が日本記録よりも記録の高い設定である（Table.1）。また日本記録の方が高い種目が3種目あるが、現実的には出場資格取得可能期間（2019年5月1日から2020年6月29日まで）に、参加標準記録を突破することは容易ではない状況である。つまり世界ポイントランキングでいかに得点を稼ぎ、2020年6月29日を迎えるかが非常に重要となる。またこの試合はエリアチャンピオンシップということで、出場資格取得期間内ではないが、東京オリンピックについては得点が反映されるルールとなっている。以上のことから東京オリンピック出場資格を得ようとする日本人投擲選手にとって非常に重要な位置付けの試合であった。

今回、本大会に日本チームのコーチとして帯同したため、本稿で、その経過や結果について報告する。そして、本報告より今後の競技力向上のための課題について言及する。まず2章では大会の経過報告を行い、3章で大会結果や戦力分析の報告を行う。また本大会終了後に日本選手団投擲ブロックにアンケート調査を行ったので、その結果を4章として報告をする。そして、これらの統括として5章で今後の課題をまとめる。

Table.1 2020東京オリンピック参加標準記録と日本記録の比較 (m)

男子		種目	女子	
日本記録	参加標準記録		参加標準記録	日本記録
18.85 (↓)	21.10	砲丸投	18.50	18.22 (↓)
62.16 (↓)	66.00	円盤投	63.50	59.03 (↓)
84.86 (↑)	77.50	ハンマー投	72.50	67.77 (↓)
87.60 (↑)	85.00	やり投	64.00	66.00 (↑)

2. 大会の経過について

2-1 大会前まで

日本選手団は2陣に分かれ先発組は4月16日、後発組は4月17日に羽田空港から日本を出発して、約12時間のフライトでカタル・ドーハに移動した。空港から宿泊ホテルまではバスでの移動で約30分程度の行程であった。

今回スタッフが選手のサポートをする際に、選手の現状を把握し、スタッフ間で共有することによりサポート体制を的確にする為に「事前カルテ」を作成した。事前カルテは選手の体調や練習状況などを10段階評価で回答を得た。実施は出発の1週間前にWEB上のアンケートフォームを使用し、連絡用SNSに添付して回答を得た。その結果、これまでに話をする機会が少なかった選手に対してもサポートが比較的行いやすか

った。出発前の選手の状況として、現在に体調についての評価は、 7.79 ± 1.37 とであり概ね良好であったが、現在のパフォーマンスの仕上がり具合についての評価は、 6.00 ± 2.07 と体調の評価と比較して低い数値を示した。また2019年に入ってから今大会は何試合目という質問については、1試合目が2名、2試合目が4名、3試合目が4名、4試合目が4名という結果であった。

それぞれ調整方法は異なるとはいえ、事前調整でのパフォーマンスの仕上がり方が万全の状態であったとは言いがたい状況の選手が多かった。我々の印象では大会運営側は世界選手権を意識し、かなり細かな部分まで気を付けている印象があった。空港からの投擲物の輸送などで、選手のストレスとなるような大きなトラブルに見舞われることはなかった。

2-2 調整環境について

調整練習は大会開催会場であるハリファ国際スタジアムのメイン競技場横の投擲練習場 (Fig.1) 及び投擲場に隣接された仮設のウェイト・トレーニング施設を中心に行った。この時期カタールではほとんど雨は降らないということで天候にも恵まれ、調整練習については問題なくスケジュールを遂行することができた。カタールは日本との時差が6時間であり、高温が予測されたが、試合のタイムスケジュールが全て午後のセッションだった為、調整練習も毎日、午後16時30分から開始した。その為、気温で体調を崩すものもなく選手にとっては、過ごしやすい環境であったと思われる。

治安の問題はなく、比較的ホテル外の行動も問題なく自由が確保された。宿泊ホテル内には無料WIFIが設置しており、選手とコーチ間での情報共有もSNS利用で安易に可能であった。

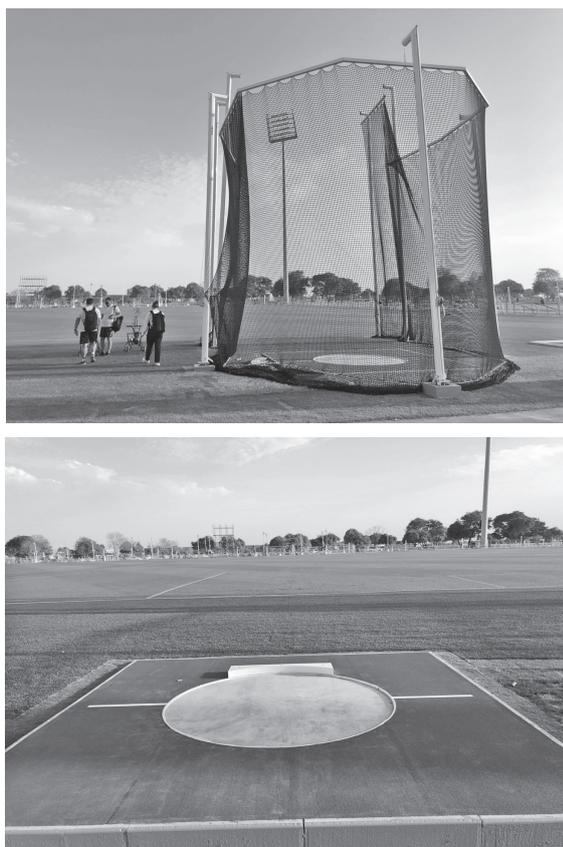


Fig.1 投擲練習場

2-3 移動手段について

宿泊ホテルからメイン会場及び付帯のサブトラック・投擲練習場までの移動は、移動時間の短縮の為、すべて警察の先導でのシャトルバスが随時出ており

会場までのアクセス時間は20～30分間程度であった。しかし競技場から宿泊ホテルに帰るバスについては、警察の先導がなかった為、渋滞に捕まることもあり帰宿時間が読めない場面があった。基本的には、競技場への移動に関して、大会期間中は20分おきにシャトルバスがでており、調整時間の微調整などが可能となる非常に有効なアクセスツールとなった。移動において、大きな問題が発生することはなかった。

2-4 飲食について

食事は、朝食・昼食・夕食共にホテルで取ることができた。衛生面も問題のない環境であった。結果的に投擲ブロックとして食当たり等で体調を壊して試合に影響が出るようなものはなかった。治安の問題などもなく、ホテルから徒歩10分程度の近隣のスーパーに食料や飲料の買い出しに行くこともできた。競技場で大会スポンサーから提供されるミネラルウォーターもホテルに持ち帰ることができ飲食に関してトラブルはなかった。

2-5 競技運営について

大会は午前の部と午後の部に分かれており、概ね午前の部が8:30～10:30に、午後の部が16:30～21:00の間で試合が行われた。海外での試合、特に筆者がこれまで参加したアジア諸国の大会では運営体制や進行がずさんなことが多い印象が強いが、今大会においてスケジュールの大きな変更はなかった。現地でのボランティアスタッフを始め、警官隊によるセキュリティーチェックがサブグラウンドでは行われていたが、メイン競技場の入場に関しては比較的セキュリティーが甘かった。また会場は一般の来場者が非常に少なかった (Fig.2)。暑い土地柄である為競技場内は冷房が効いていてスタンドにいる際は防寒着を着用する必要があるほどであった。試合時に海外での試合特有の音楽も流れて、リラックスした雰囲気での試合となった。

投擲練習場に隣接したコールルームからは、試合会場まで選手をバスに乗せて移動するシステムで選手からも高評価であった。今回、男子ハンマー投げ以外の投てき種目においては予選ラウンドがなく、決勝ラウンドのみというシステムであった。決勝ラウンドでは、全員が3本試技を行い、上位8名が3本試技を行うという日本でのシステムと同様であったが、最終投擲前にもう一度試技順を入れ替えるシステムが運用されていた。

投擲物の検定については、テクニカルインフォメー

ションセンター（以下、TIC）で行われた。大会側で準備されている投擲物と同じものは検定出来ないと事前に通知されていたが、男子円盤投において、実際に試合が始まってみると準備されているはずの投擲物が準備されていないという状況があり非常に困った場面があった。それ以後は、男子円盤投の事例をTICで話し、比較的安易に検定を通すことが出来た。



Fig.2 メイン競技場

ル2個の計2個であった。当初の目標の一つをエリアチャンピオンによる世界選手権出場権獲得としていたが、それを果たすことは出来なかった。8月までに世界選手権の参加標準記録突破したいところだが、投擲種目において現実的には程遠い種目が多い現状である。その為エリアチャンピオンによる出場権の獲得を目指したが、各種目に格差はあるものの想定した以上に優勝者のパフォーマンスが高く、5種目において世界選手権の参加標準記録を超えていた。

また、投擲者のみで入賞者数を参加した国・地域別で見ても、日本は男子が入賞者2名で第5位、女子が入賞者6名で第2位という結果であった。一見女子は高い水準に見えるが、第1位の中国は投擲4種目全て優勝、やり投げにおいて1名しか参加していない以外は、全て上位入賞と圧倒的な強さを見せつけられた大会となった。また今大会は女子の投擲選手の参加が少なく出場して記録が残っただけで入賞する種目もあった（Fig.3）。日本の投擲種目が世界選手権に出場する為には、エリアチャンピオンによる出場権の獲得も厳しいものとなり、世界選手権の参加標準記録を突破することが必要になってくると考えられる。

また投擲練習場とメイン競技場のサークルの表面の状態がかなり違うものであったりする場合があるが、今回はその様な問題がなかった。またメイン競技場、サブ競技場、投擲練習場共にサーフェスも通常使用しているサーフェスの感覚に近いものであった。

3. 大会の結果と戦力分析

3-1 競技成績について

試合結果は、Table.2の通りである。メダル獲得数についてみると、金メダル0個、銀メダル0個、銅メダ

*アジア選手権PlacingTableの投擲種目のみを1位を8point, 2位を7point … 9位を2point, 8位を1pointというように加算する。

Men																									
国別得点																1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	参加人数	
	CHN	IRI	IND	TPE	JPN	QAT	UZB	KOR	TJK	KUW	KAZ	JOR	BRN	PAK	MAS	SRI	8	7	6	5	4	3	2	1	
砲丸投	8	5	8	0	0	0	0	3	0	2	6	0	4	0	0	0	IND	CHN	KAZ	IRI	BRN	KOR	KUW	CHN	14
円盤投	2	15	0	0	5	4	3	1	0	0	0	6	0	0	0	0	IRI	IRI	JOR	JPN	QAT	UZB	CHN	KOR	14
ハンマー投	5	0	0	0	0	7	6	4	8	5	0	0	0	0	1	0	TJK	QAT	UZB	KUW	KOR	CHN	CHN	MAS	17
やり投	6	0	7	13	6	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	TPE	IND	JPN	TPE	CHN	PAK	CHN	SRI	13
総合得点	21	20	15	13	11	11	9	8	8	7	6	6	4	3	1	1									
入賞人数(実数)	7	3	2	2	2	2	2	3	1	2	1	1	1	1	1	1									

Women																									
国別得点																1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	参加人数	
	CHN	JPN	IND	THA	BRN	KOR	UZB	TPE	IRI	INA							8	7	6	5	4	3	2	1	
砲丸投	14	9	0	0	7	0	0	3	0	2							CHN	BRN	CHN	JPN	JPN	TPE	INA		7
円盤投	15	3	9	6	1	0	0	2	0								CHN	CHN	THA	IND	IND	JPN	IRI	BRN	9
ハンマー投	15	10	0	3	0	5	0	0	0								CHN	CHN	JPN	KOR	JPN	THA			6
やり投	8	5	9	6	0	3	4	1	0								CHN	IND	THA	JPN	UZB	KOR	IND	TPE	9
総合得点	52	27	18	15	8	8	4	4	2	2															
入賞人数	7	6	4	3	2	2	1	2	1	1															

Total Point																									
国別得点																									
	CHN	JPN	IND	IRI	THA	TPE	KOR	UZB	BRN	QAT	TJK	KUW	JOR	KAZ	PAK	INA	MAS	SRI							
砲丸投	22	9	8	5	6	3	3	0	11	0	0	2	0	6	0	2	0	0							
円盤投	17	8	9	17	6	0	1	3	1	4	0	0	6	0	0	0	0	0							
ハンマー投	20	10	0	0	3	0	9	6	0	7	8	5	0	0	0	0	1	0							
やり投	14	11	16	0	6	14	3	4	0	0	0	0	0	3	0	0	1								
総合得点	73	38	33	22	21	17	16	13	12	11	8	7	6	6	3	2	1	1							
入賞人数	14	8	6	4	3	4	5	3	3	2	1	2	1	1	1	1	1	1							

Fig.3 第23回アジア陸上競技選手権大会における投擲種目のみのPlacingTable

3-2 記録達成率について

今大会での日本人選手の戦力分析を記録達成率（自己記録に対する達成率、以下、達成率）で数値化し、平均値±標準偏差で示した（Table.2）.男子91.50±2.82%、女子81.00±30.86%と記録達成率は男女共に高いものとは言い難い結果となった。また日本選手団・投擲ブロックの男女の比較をみると、女子の方が顕著に低い数値となった。残念ながら、投擲ブロックで記録達成率が100%を上回ったのは、1名もいない結果となった。試合時の気象条件などが悪かったわけではない中で投擲ブロックの記録達成率が低い状態であることは受け止めなくてはならない。

田内（2007）は、やり投げにおいて記録達成率は世界大会で上位に入賞する選手ほど高く1～3位の世界大会事前6試合の記録達成率平均が98%以上、4～8位が96%であると示している。気象条件で影響のされやすいやり投げにおいても、これだけ高い達成率

が示されている。種目差はあることが予測されるが、日本選手団が世界でのメダルや入賞を意識するのであれば、避けては通れない数字であるといつてよいと考えられる。今回出場した選手たちは国内の試合では自己記録達成率が95%を下回るような記録であっても、国内ではそれなりに上位入賞することが出来る。そもそも自己記録自体が世界に劣っている中で、記録達成率まで低い数値であることは問題視すべき大きな課題ではないかと考えられる。この状況下では世界で戦っていくことが非常に困難であることを示している。日本代表選手の海外での自己記録達成率の低さは日本の投擲レベルの低さを顕著に露呈してしまったように感じた。記録の達成率はもちろんだが、大会において重要な順位達成率は事前の参加者ランキングが出ていなかった為、今回の遠征では触れない。しかしランキング以上の順位成績を収めることは重要な評価ポイントとなると考えられる。

Table.2 第23回アジア陸上競技選手権大会（カタール・ドーハ）投擲ブロックの競技結果及び自己記録達成率

種目	名前	自己記録	リザルト		結果	自己記録達成率
男子・砲丸投	選手A	18m85	決勝	17m51	全体の9/14位	92.89%
男子・円盤投	選手B	62m16	決勝	57m90	第4位入賞（14名中）	93.15%
男子・円盤投	選手C	58m53	決勝	52m45	全体の11/14位	91.70%
男子・ハンマー投	選手D	70m63	決勝	65m86	全体の9/12位	93.25%
男子・ハンマー投	選手E	70m06	予選	59m62	全体の15/17位	85.10%
男子・やり投	選手F	86m83	決勝	81m93	第3位入賞（13名中）	94.36%
男子・やり投	選手G	80m18	決勝	71m44	全体の11/13位	89.10%
女子・砲丸投	選手H	16m57	決勝	15m68	第4位入賞（7名中）	94.63%
女子・砲丸投	選手J	16m47	決勝	15m50	第5位入賞（7名中）	94.11%
女子・円盤投	選手J	59m03	決勝	NM	順位なし	0.00%
女子・円盤投	選手K	54m00	決勝	52m87	第6位入賞（9名中）	97.91%
女子・ハンマー投	選手L	65m32	決勝	59m70	第5位入賞（6名中）	91.40%
女子・ハンマー投	選手M	66m79	決勝	63m54	第3位入賞（6名中）	95.13%
女子・やり投	選手N	62m37	決勝	52m40	全体の9/9位	84.01%
女子・やり投	選手O	60m86	決勝	55m27	第4位入賞（9名中）	90.81%

4. 出場選手へのアンケート調査

4-1 調査目的について

本大会では選手の満足度を把握することを目的としてアンケート調査を行った。選手を対象にアンケートを実施し、調査結果は今後の選手への円滑なサポートの参考とする。

4-2 調査方法について

実施は大会が全て終了した2019年4月24日～30日に対象者をアジア選手権の日本代表団・投擲ブロックの全選手とした。調査はWEB上のアンケートフォームを使用し、連絡用SNSに添付して送付して回答を得た（Fig.5）。

その結果、選手14名中14名が回答した（回答率100.00%）。各設問（内容は結果を参照）には、10段

階評価してもらい「良かった」を10点、「悪かった」を1点とした。

Fig.4 WEB上のアンケートフォーム

4-3 調査結果について

アンケート調査の結果をTable.3にまとめた。結果は全選手の平均値±標準偏差で示す。

A) 現地での調整について選手の評価は 6.77 ± 2.28 という数値を示し、自由記述では投擲練習場の環境を指摘している選手が多数いた。調整段階で大きな問題はなかったように感じる。B) 現地での移動(ホテル～競技場)についても、 7.69 ± 1.89 と良好であった。感想内容からも満足度が伺える。C) 現地での食事については、 6.92 ± 2.22 という数値を示し、ほぼ全員の選手が「毎日同じ食事で飽きた」ということを記入していた。D) 大会の運営については、 7.23 ± 1.83 という数値を示し、大会スタッフの気遣いが素晴らしかったという意見が最も多かったが、試合での投擲物の問題を指摘している選手が多かった。E) 記録達成率については、 3.31 ± 2.14 と本アンケートの中で最も低い数値を示した。自由記述の内容から、「技術的な安定度の低さ」と「メンタルの弱さ」の大きく分けて

2点の反省をしている選手が多いようにみえた。実力を出すことが出来たと評価している選手はいなかった。F) 順位達成率については、 3.00 ± 2.48 と最も低い数値を示し、「3本以内に投げられなかった」という反省が多く見られた。

Table.3 選手へのアンケート調査の結果

A) 現地での調整について[感想]
[選手からの評価 (10段階評価)] 6.77 ± 2.28
「メイン競技場と投擲練習場のサーフェイスの違いが大きかった」 「サークルも多く、ミネラルウォーターや補助食品が準備されて良い投擲練習場だった」 「投擲練習を行うのに混み合うこともなくスムーズに練習ができた」 「サークルの表面の状態が日本のサークルとは違った」
B) 現地での移動(ホテル～競技場)について[感想]
[選手からの評価 (10段階評価)] 7.69 ± 1.89
「シャトルバスの本数も多く、時間の調整などが安易に出来て便利だった」 「試合当日から投擲練習場にはシャトルバスが運行しなかった」
C) 現地での食事について[感想]
[選手からの評価 (10段階評価)] 6.92 ± 2.22
「毎日同じメニューの食事で食べるのが苦痛になった。変化のない食事の為、日本から色々(調味料、ドレッシング、インスタント食品など)持って行くべきと感じた」 「一昨年のインドのアジア選手権に比べると衛生面の不安感は無くて良かった」
D) 大会の運営について[感想]
[選手からの評価 (10段階評価)] 7.23 ± 1.83
「試合会場での投擲物の種類が事前資料にあるものがなかった」 「審判の英語は理解できなかったが、ジェスチャーで分かりやすく説明してくれた」 「メイン競技場内の空調設備が効きすぎて寒かった」
E) 記録達成率について[感想と自己分析]
[選手からの評価 (10段階評価)] 3.31 ± 2.14
「改善していた技術の完成度が低かった」 「技術が安定しなかった為、記録が悪くなってしまった」 「狙った試合で実力を発揮できないメンタルの弱さを痛感した」 「調子が良く、記録を狙い行き過ぎた結果、良い試技が出来なかった」 「自分の自己記録の位置で、この達成率では海外では絶対に通用しない」
F) 順位達成率について[感想と自己分析]
[選手からの評価 (10段階評価)] 3.00 ± 2.48
「最低目標であるメダルを獲得できた事は良かったが、記録が低すぎると感じた」 「緊張して自分に余裕が無く、自分のやるべきことが何も出来なかった」 「前に飛ばせば決勝に残る試合で、冷静でない為その状況すら読めてなかった」 「海外では3本以内に確実にベスト近くを投げられるようにしなければならない」 「3投で予選を通過できる記録を投げる必要がある中で、焦ってしまった」 「怪我で調整も全く間に合わず勝負ができなかった」 「最低な試合をしてしまった」

5. 今後の課題

当たり前のことのようにであるが、日本人選手の多くは、外国人選手に初めから体格や力で負けてしまうのではないかと思っているところがあるように感じる。本大会に参加した選手たちの中でも、2020年を見据えた選手は必要以上に結果を意識しすぎてパフォーマンスを落としてしまっている状況が見受けられたように感じている。物怖じせず堂々と戦っていた印象はあまりなかった。これは選手だけでなく、我々コーチ陣も選手へのアプローチを反省しなければならない材料である。今後、本大会に参加したメンバーが中心となり、2020年オリンピック東京大会で日本人選手として活躍してほしい。そのためには、それぞれ課題を把握し継続的なトレーニングとともに、大舞台で記録を出すための準備を常に心がけて活躍し続けなければならない。自分の競技力が日本だけでなく、アジアや世界でどの位置であるかの確認や自分が出場する国際試合の中での、パフォーマンス手段をより熟慮することが必要不可欠であることを訴えた。選手だけでなくコーチも含め、自分達の現在の立ち位置を正確に把握することで、アジアや世界での戦い方を考えていくことが重要であると考えられる。我々のこうした経験が今後の国際大会での活躍や陸上競技の発展に寄与できれば幸いである。

謝辞

本報告にあたり、大会参加者としてアンケートにご協力いただいた日本代表団・投擲ブロックの選手の皆様に感謝しております。今後とも日本陸上・投擲界が益々発展して行くことを期待しております。

参考文献

田内健二(2007): 投擲 やり投げの競技特性と世界レベルに対する日本選手の課題, 陸上競技学会誌く 6,100-104.

Received date 2019年11月7日

Accepted date 2020年1月16日